

今石動五郎丸と記し、その註に曝布なりとあるものはである。

コロモガハ 衣川 鹿島郡能登島須曾にある幅三米許の川をいふ。別所から出で、流程二軒餘。

ゴンエ 言惠 ↓レンシン 蓮心。

コンカイモノガタリ 今怪物語 ↓シフゴ

ロク 四不語録。

コンケンテキシヤ 混見摘寫 二十冊。吉田守尙著。織田・豊臣・徳川・前田その他諸藩の武事・奇談・古人の評論等を載せ、加越能古戦場の事實も多く記されてゐる。著者が安永四年まで三十五年間に輯録したものである。

ゴンゲンドウ 権現堂 ↓ラサキジンジャ 尾崎神社。

ゴンゲンドウノカナ 権現堂の鐘 ↓トキガネ 時鐘。

ゴンゲンドウベツトウヤシキ 権現堂別當屋敷 ↓ジンゴジ 神護寺。

ゴンゲンドウマル 権現堂丸 金澤城内北、丸の地に東照宮社を置いたから、その後北丸を権現堂丸といふこともあつた。異本夜話録に、前田利常の時、鹿島檢校西町に屋敷を賜はり居住した頃、権現堂丸のうしろの松木を二三本拜領したいと願うたことが見える。

ゴンゲンノオイケ 権現の御池 白山の市、瀬口舊登路に在る。越前名蹟考に、『畜生谷の上、左の方に風穴あり。之を登りて道の右に池あり。権現の御池といふ。水の色赤く見ゆれども、人めは清し。此池にて、ひねりを浮ぶとて、かうよりを入れて、浮沈にて事の上あしを占ふといふ。』とある。今の巖池のことであらう。

ゴンゲンマツリ 権現祭 鹿島郡石動山(部落名)の内なる焼尾の呂民は、同山内譽津石権現の墳塋に参拜し、業を休むを権現祭といひ、今八月二十日に於いてする。譽津石権現は、崇神天皇の皇子譽津別命で、その呂民がこれに隨うて此の地に來たものと口碑して居る。

ゴンゲンモリ 権現森 河北郡黒津船地内なる小濱神社の舊社地附近にある森林をいふ。小濱神社は一に黒津船權現とも言はれたからである。砂丘の高さ五三米。

コンゴウザキ 金剛岬 珠洲郡山伏山の東端にあつて、巖壁の高さ五五米、長さ二〇〇米許。寶永元年一覽記に、『舟見當の火燈は、山伏山の麓則金剛岬の上にある。』と見え、又文化六年郡方書上に、『山伏山常燈小屋、諸廻船見當の爲、三月より九月迄夜中燈被仰付。』とある。

コンゴウジ 金剛寺 金澤泉寺町に在つて、永龜山と號し、曹洞宗に屬する。天正年中懸等之を越中守山海老坂に建立し、慶長十二年犀川一ノ橋邊に移轉し、後現地に移つたといふ。一ノ橋は大橋のことである。

コンゴウジ 金剛寺 金澤久保市乙劍神社に屬した眞言宗の別當で、久保市山法住坊金剛寺といふた。慶長六年神靈と共に新町から卯辰山に移され、寶泉坊の向かひ賢聖坊の隣地に居た。元祿三年の草庵集に、『卯辰金剛密寺は瑜伽最上乘の靈場にして、乙劍大明神垂跡の地なり。本地は不動明王なりとかや。』といふものはである。明治元年神佛混淆禁止の後、法住坊は復飾して久保市金哲といひ、神職とり、次いで舊地新町に復した。

コンゴウジ 金剛寺 金澤の町端、石川郡泉野新の地内に居た當山派の山伏である。金剛寺由來記に、元祖三悅坊は能美郡金剛寺村に居たが、寛永十二年石川郡泉野欠上新村領へ引移つた。その後慶安の頃同村伊右衛門といふ者が神明宮を勧請した爲その別當となり、社務を勤めて來たとある。山伏金剛寺は明治元年神佛混淆禁止の後復し、神社は今國野神社になつた。

コンゴウジ 金剛寺 能美郡山上郷に屬する部落。蔭涼軒日録長祿二年八月四日の條に、『南禪德雲院内寶諸軒不知行加賀國和氣保金剛寺村内魏興三人道跡、嘉吉元年十月金剛院押領云々。』など見え。又同書長祿三年九月廿八日には、『賀州禪昌寺領金剛寺村之事、代々御判當知行之處、自金剛寺違亂之由披露之云々。』とあつて、金剛寺があつた爲に起つた村名であることが知られる。

コンゴウジ 金剛寺 もと羽咋郡子浦に在つて天台宗であつたが、後貧寺で零落した爲、珠洲郡大屋なる藥師の古跡に、金剛寺再興を企て、明暦二年乘龍寺隱居快重が入寺したが、正保四年再興の寺院を禁止せられたを以て退轉した。

コンゴウジコウマツ 金剛寺幸松 天文末年頃の人で、能美郡館村の虚空藏山城に居たといふ。

ゴンゴロウノミヤ 權五郎の宮 鳳至郡谷内の小字打越に在つた。能登誌に、『此打越村は昔は一村なりしかど、今は谷内村の内となれり。此所に興兵衛といふ百姓あり。舊家にて鎌倉權五郎景政の裔孫といひ傳へり。』と見える、その緣故によつたものであらう。

ゴンシチガツジ 權七ヶ辻 金澤片町から堅町へ入る四ヶ辻を、昔は權七ヶ辻と呼んだ。酢屋の權七といふ者此の辻に居住した爲といふ。後に呼び誤つて五七ヶ辻と稱したが、今はその名がない。酢屋權七は慶長六年前田利常夫人の來嫁した時、江戸から隨從したものである。

ゴンジャク 言若 鳳至郡合鹿の散村。言尺とも權舎とも書く。阿部判官義宗の文書といふものは地境の爭議の爲偽造したものと思はれるが、そのうちに書かれた地名は實際であり、今も『こんじゃくのこりん石』といふものが存する。

コンジャクモノガタリ 今昔物語 今昔物語は、後冷泉・後三條帝の治世を盛年とした源隆國の著といはれ、後人亦甚だしく補足したのであらうと思はれるが、要するに隆國以後甚だ遠くない時代に成つたものであらう。本書に載せる物語の中には能登國鳳至孫得帶語、能登國掘鐵者行、佐渡國一掘、金語、能登國鬼寝屋語、加賀國語、蛇蟻、島行人助、蛇住、島語があり、又殘闕今昔物語には能登守依、直心息、國得、財語があるが、これは鳳至孫の物語から換骨脱胎したものである。今昔物語の記する所は、頗る怪奇を極めてゐるやうに見えるが、その中から當時の世相をつかむことができる。國司に貪婪の徒の多かつたこと、鳳至比古神社が世に著れた大社で、之に奉仕する神職が富有であつたこと、七つ島・船倉島が北海の好漁場として、漁夫の注目を惹く所であつたこと等がそれである。能登の物語の多いのは、海上の交通によつて上國に傳聞せられる機會があつたのであらう。